

Harrison 32C EQ

概要

Harrison 32Cは名門のHarrison「4302コンソール」のEQモジュールです。

「ABBA」や「Sade」をはじめとする無数のヒット・レコードは素晴らしいアーティストとHarrisonコンソールから生まれました。4302は空前の大ヒットを記録した「Thriller」を含む多くのマイケル・ジャクソンのアルバム制作時にミックスファームとして使用されたことで有名です。オリジナルの4302は「Thriller」のエンジニア「Bill Putnam protégé Bruce Swedien」と共にフロリダにあります。そこで彼が「驚異のサウンド」と呼び愛用し続けています。Universal Audioのプラグイン32C EQモジュールの重要な測定は Swedien氏個人所有のコンソールで行いました。ハイとローにカットフィルターをついたカラフルなサウンドの4バンドEQは彼がHarrisonから得た「暖かくて豊かな音」を実現し、彼が大ヒットを記録したレコードを制作したときに経験したときと同じような「インパクトがあり、明快な音、そしてクリエイティビティ」を提供するでしょう。

Harrison32Cは4つのパラメトリック・イコライザーを搭載しています。各バンドそれぞれにフリークエンシーとゲインコントロールがあります。32Cには、オリジナルのハードウェア・ドキュメンテーションによると一般的なQの代わりに自動的に有効な帯域幅を調整する特別な回路を搭載しています。このダイナミックな資質と各バンド間への相互作用はこのデバイスの音楽的な才能と独特の音に貢献しています。

ローEQバンドをピークからシェルフ・モードに切り替えることができます。またハイ/ローパス・フィルターは使用可能です。オリジナルに存在せずデジタルのみの機能はゲイン、フェイズ・インバート、それとグローバル・パワーの切り替えスイッチが追加されています。より高い事例向けにSEバージョンが用意されています。

Harrison 32C EQ スクリーンショット



82. The Harrison 32C EQ プラグイン・ウィンドウ

Harrison 32C EQ と Harrison 32C SE のコントローラー類

パワー

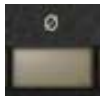


パワースイッチはプラグインがアクティブかどうかを決定します。ボタンをクリックして状態を切り替えてください。パワースイッチの状態がオフの時、プラグイン処理もオフとなり、行われません。そしてUAD、DSPの負担は軽減されます。

パワー LED

プラグインがアクティブな状態のときパワーLEDが点灯します。

フェイズ



フェイズボタンは、180度のフェイズ・シフトを加えることによって信号を逆相にすることができます。ボタンが押し込んである状態(より暗く写ります)では信号は逆相です。通常はノーマル・フェイズに設定しておいてください。

カット・フィルター



4バンドのEQWに加えてHarrison32Cはハイ/ローそれぞれのカット・フィルターを搭載しました。1オクターブあたりのカット・フィルターのスロープは12dBです。

カット可能な状態

ハイ/ローパス・フィルターは「Cut Enable」スイッチによってオン/オフされます。

スイッチが「IN」状態(押し込んでいる/画面上では少し暗くなる)になるとカット・フィルターは「ON」になります。

カット・フィルターがオンになっているとき、「0カット」の位置(それぞれ20Hzと20kHzにフリークエンシー値を設定しても回路のカラーはモデリングされます。グラフィカル・インターフェイス上では、EQイン・スイッチのカット・フィルターのイン・スイッチが配置されています。

ハイパス (ローカット)

このコントロールはハイパス・フィルターのカットオフ・フリークエンシーを調節します。

設定可能範囲は25Hzから3.15kHzです。

ローパス (ハイカット)

このコントロールはローパス・フィルターのカットオフ・フリークエンシーを調節します。

設定可能範囲は1.6kHzから20kHzです。

4EQバンド



4つのEQバンドにはそれぞれ同様のコントロールがあります。コントロールする周波数帯は上段のノブで、ゲインは下段のノブで調節します。

ロー・ピーク



ローEQバンドでは、ピーク、シェルビング、どちらのモードでも使用可能です。ロー・ピークがオフの状態にあるとき、ローEQバンドはシェルビング・モードで動作しています。ロー・ピーク・スイッチがオンの状態になっている場合ローEQバンドはピーク・モードで動作しています。(他のバンドが常にピーク・モードで動作します。)

ロー・フリークエンシー

このコントロールはローバンド・フリークエンシー(低域周波数帯)の値を決定します。(またはシェルフ・モードではフリークエンシーのエッジ)ゲイン設定によって増減させられる周波数範囲は40Hzから600Hzまでです。

ロー・ゲイン

このコントロールはロー・バンドのゲインコントロールをします。増減可能な範囲は10dB±です。

ローミッド・フリークエンシー

このコントロールはローミッドレンジ・バンド(低中域周波数帯)の値を決定します。ゲイン設定で増減させられる周波数範囲は200Hzから3.1kHzです。

ローミッド・ゲイン

このコントロールはローミッド・バンドのゲインコントロールをします。増減可能な範囲は10dB±です。

ハイミッド・フリークエンシー

このコントロールはハイミッドレンジ・バンド(高中域周波数帯)の値を決定します。ゲイン設定で増減させられる周波数範囲は400Hzから6kHzです。

ハイミッド・ゲイン

このコントロールはハイミッド・バンドのゲインコントロールをします。増減可能な範囲は10dB±です。

ハイ・フリークエンシー

このコントロールはハイレンジ・バンド(高域周波数帯)の値を決定します。ゲイン設定で増減させられる周波数範囲は900Hzから13kHzです。

ハイ・ゲイン

このコントロールはハイ・バンドのゲインコントロールをします。増減可能な範囲は10dB±です。

ゲイン



ゲイン・ノブはプラグインからの出力レベルをコントロールします。デフォルト値は0dBです。増減可能な範囲は10dB±です。

Harrison 32C SE



83. The Harrison 32C SE プラグイン・ウィンドウ

概要

UAD Harrison 32C SeはUAD Harrison 32Cから由来しています。そのアルゴリズムはHarrison 32 Cより少ないDSP使用で、同様の音色特性を提供するために改訂されました。DSPリソースが限られている環境でもHarrisonの音色を使用することができます。

素晴らしい耳を持っている誰もがそれが必ずしもフルバージョンと同じように聞こえるとは言いません。しかし、サウンドはとても素晴らしくほとんどの状況で使用しても問題ありません。

Harrison 32 CとHarrison 32 C SEはノブの色と本体のモジュール名で区別できます。Harrison 32 Cの象牙製ノブの代わりに32 C Seでは青いノブを使用しています。またインターフェイス・パネルの右上には「SE」がついたモジュール名を表記しています。

Harrison 32C SE コントロール

Harrison 32 C SEのコントロール類はHarrison 32 Cとまったく同じです。Harrison 32 C Seのコントロールに関する説明はHarrison 32 Cのセクションを参照してください。(240ページの「Harrison 32 CとHarrison 32 C SEのコントロール」を参照してください)

Harrison 32C レイテンシー

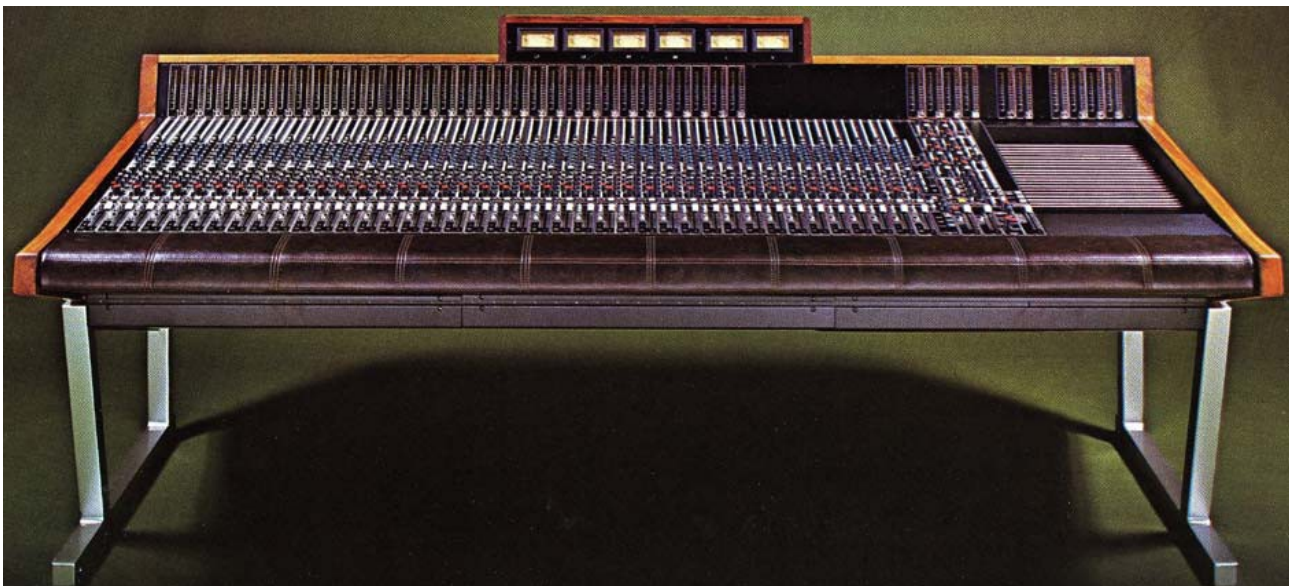
Harrison 32 C (Harrison 32 C Seではない) は、音の精度を驚異的に増すために、内部でアップサンプリングという技術を使用しています。

アップサンプリングを行うということは他のUADプラグインよりもレイテンシーが少しだけ大きくなります。この補正を行うためにDelayCompかTrackAdvで「サンプル」に任意のパラメーターを入力してください。詳細については97ページの「アップサンプリングしたプラグインの補正」を参照してください。

Harrison 32C SEはアップサンプリングされないため、上記の補正を必要としません。

注意:

ホストアプリケーションが信号経路内のプラグイン・レイテンシーを補正する設定が可能か、または出力のみに使用する場合にはHarrison 32 Cを補正する必要はありません。90ページの「ホストPDCの実行」を参照してください。



Harrison 4032 コンソールとHarrison 32C EQ

UAD Harrison 32CプロジェクトはBruce Swedien氏の丁寧な協力の下に進行しました。